

学び続け、「奉仕」すること が教師の「道」

子どもを成長させるために、学び続ける教師だけが教壇に立てる。
成長しないとすれば教師ではない。教師の「道」を考える。

徹底して「奉仕」を 行う職業

昨年十一月、私たちは北海道師範塾「教師の道」を立ち上げました。その理念は次のようなものです。

「学び続ける教師だけが、教壇に立つことを許される。成長し続ける教師だけが、子どもを成長させることができる。教師は、子どもたちに努力の大切さを伝え、学びの『道』を指し示すべき存在である。だからこそ、教師は、自ら努力を重ね、学びの『道』を実践する者でなくてはならない」

「はじめから力のある教師はいない。子どもたちと同様、教師もまた、学びながら成長していく存在

なのだ。我々は、教師たる自覚と矜持を持ち、子どもたちのために自ら襟を正し、研鑽を重ねる者のみが、教師としての価値ある道を歩むことができるのだと確信している」

私は教師というのは徹底して「奉仕」を行う職業だと考えています。そして学習指導要領に基づく「知・徳・体」の指導を徹底して行う。これが教師の本質であろうと思えます。このことは全ての教師が自覚しているはずですが、例えば札幌市教育委員会の「教師の仕事・サービスの宣誓」には「私は、ここに日本国憲法を尊重し、且つ、擁護するとともに、教育を通じ全体に奉仕すべき責務を深く自覚し」とあり、札幌市の全ての教師が署名をして

いるはずなのです。本来はこの通りやらなければ、解雇されてもやむを得ないというほどのものです。

この通りに実践していれば、北海道教育が「知・徳・体」全てで低迷するということはありません。

絶えざる研究と 修養に道がある

サービスの宣誓をしていながら、その通り実践しなかったとすれば、辞めるべきです。それぐらいの覚悟と社会的な評価が必要ではないかと思えます。何も勉強しない、成長しない、学び続けたいとすれば、そういう者は教師ではありません。私はそう思っています。

教育基本法第九条には「法律に

定める学校の教員は、自己の崇高な使命を深く自覚し、絶えず研究と修養に励み、その職責の遂行に努めなければならない」とあります。私はここに道があるのでないかと思っています。絶えざる研究と修養を続ける。そして最後は教員自身の自己実現を成す。教師をやつてよかったという思いを抱く。こうしたことが意欲になっていくと思うのです。

私自身は、目の前にいる子供たちを日本一の子供にしたい、世界一の教育をしたいという思いで、教



鈴木重男

すずき・しげお
北海道文教大学准教授
北海道師範塾「教師の道」
事務局長

1947年生まれ。北海道教育大学札幌分校卒。北海道札幌盲学校及び高等盲学校で教鞭。北海道教育庁指導主事、北海道札幌養護学校校長、札幌大学講師等を経て、現職。北海道師範塾「教師の道」副塾頭兼事務局長を務める。

材を作り、様々な場に出かけて勉強してきたつもりです。

文部科学省が実施した全国学力テストで、北海道の成績は最下層に低迷しました。原因はいろいろあるでしょうが、一番の問題は「学ばない教師」にあるのではないかと私は感じています。

北海道教育委員会の調査報告(平成二十二年九月)によると、例えば「一日一時間以上勉強する児童生徒の割合」は北海道では小中学校とも全国と比較して極めて低く、「宿題をよく出している学校の割合」も少ないなど、家庭における学習習慣に課題があることが分かりました。

学校がきちんと宿題を出して、各家庭に「今日はこのような宿題を出しました。お父さんお母さん、ぜひ見て下さい」と毎日きめ細かく知らせる。そして翌日、子どもたちが提出した宿題にマルを付ける。こうしたことを繰り返していけば、「知」の問題はある程度解決できると思うのです。

「徳育」では、「いじめの理解や

指導方法、児童生徒理解などに関する力量を高める研修」「情報モラルやインターネットの危険性に関する指導」を行っているのは四割に満たない状況です。

なぜ各学校が「我が校はしっかりとやっている」と言えないのか。道教委が態勢を整えていけば、徳育



大学での講義の様子

の問題も解決していくと私は思います。

教師の誇りが教育向上の力に

『教育と医学』六月号に「学力&体力日本一の福井県の教育に学ぶ」という一文を、太田あや氏が書いておられます。

福井県は一九五六年から行われていた全国テストでも好成績を残していました。そして日本教職員組合の反対で全国テストが四十三年間中断していた時も、独自の「学力テスト」と「体力テスト」を継続していたそうです。

実は北海道も継続はしていません。ただ、それは学校内でのランク付けと進路指導のためです。福井県は生徒の弱点を見出し、それを克服するためのプランを学校ごとに作って実行していたということです。

北海道で、なぜ今までこのような活かし方ができなかったのか。また、太田氏によると福井では

「先生が信頼され、尊敬されていることが伝わってきた。この先生への評価はそのまま『公教育への信頼』と聞いていいと思う。学校の先生方は、子どもの教育を一身に背負っているという誇りを持って仕事に取り組んでいる」というのです。

私はやはり、教師一人ひとりが教育技術を磨いて、良い授業を授業をすれば、必ず子どもや保護者、同僚、管理職、そして地域の人たちからも認められます。そうすると教師は誇りを持つ。それが北海道教育の向上につながるはずなのです。

教師一人ひとりに確かな力量、プロとしての力を持たせるためには、根っこが大切です。学び続けるというエネルギーです。その根っこになるのは「奉仕」です。奉仕という心がけを持って研究と修養を続けていくことが何より大切だと思います。■

北海道人格教育懇話会(六月二十一日)より